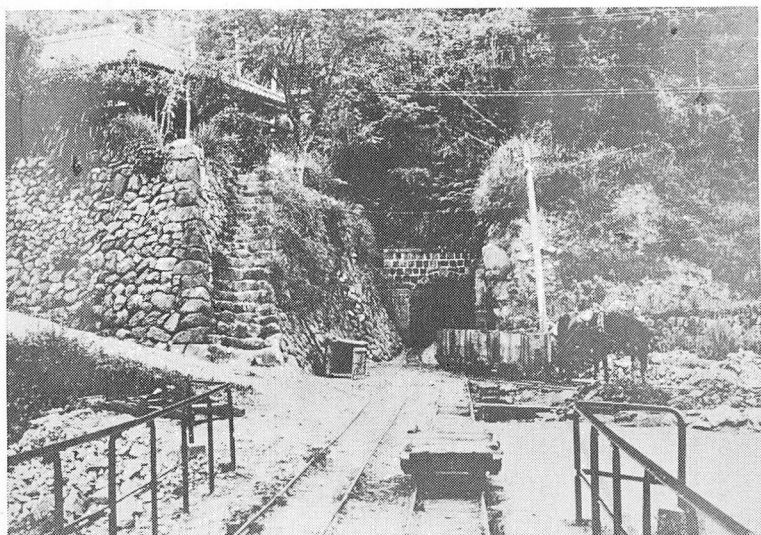




三井串木野金山西山坑々内作業



同上芹ヶ野坑通洞口（昭和3年6月）

## 口絵 三井鉱山串木野鉱業所西山坑内作業および同芹ヶ野坑通洞

(三井鉱山株式会社蔵) 原寸 上段12・8×10・3 種  
下段15・1×10・5 種

戦前における三井鉱山所有の串木野金山は、鹿児島本線串木野駅から芹ヶ野駅一帯にひろがる日本有数の金山であった(現在も稼行)。写真に掲げた西山坑(第一坑)と芹ヶ野坑(第二坑)は、この串木野金山の中心坑口であり、前者は一九〇六年(明治三九)一月に地元の諸鉱業者の小鉱区を一括して買収し、後者は一九二八年(昭和三)二月に島津家の諸事業を統轄する薩摩興業株式会社から買収した。

串木野金山の歴史は古く、口碑によればその歴史は万治年間(徳川時代初期)に遡ると言われ、近世においては串木野金山とは呼称せず、この地域一帯の金山は芹ヶ野金山と称された。西山坑は元禄元年(一六八八)に川内の鍋商人新原喜左衛門が西山鍾(鉱脈)を発見して稼行したとされ、西山金山の開祖として藤沢奥山谷に現在碑が建っている。西山坑がいつ島津家の所有に移ったか不明であるが、一八七五年(明治八)頃に同家はこの金山を手離している。同金山の鉱石中に含銀量が多くなり混汞製煉に適さなくなったためとされる。その後同鉱山の所有者は田中龍太郎、千歳組、鉱業館などと次々に変遷し、一八九二年(明治二五)の鉱業条例の先願主義によって、諸々の人士に区分され小鉱区乱立の姿となった。その後、露頭部分を掘尽した小鉱業者は、湧水によって採掘が困難となったため、一九〇五年(明治三八)春から三井と交渉して翌年二五万八五〇〇円で一括譲渡することになったのである。三井鉱山では一九一二年(明治四五)一月に製煉所の建設に着手し、翌年にはそれを完成させている。芹ヶ野坑も島津家の所有であったが、一九二八年(昭和三)の一五銀行の破綻により島津家の財政整理がおこなわれ、三井鉱山が二月に買収し(前年三月より三井串木野鉱業所では同山より買鉱)、串木野金山の第二坑とした。

西山坑内の写真の撮影年月は不明である。まん中に監督者らしい人物があり、右手前と右端には、えぶ(鉱石を運ぶ籠)を背負った女子や子供の姿がみられる。採掘用具は鑿と鑿で機械類が一切みられないところを見ると、大正期から昭和初期までの状態であろう。通洞坑とは坑口から水平に開鑿された主要坑道のことである。昭和初年には芹野坑では坑内各所から集められた鉱石は、通洞坑から馬匹によって坑外に運び出された。坑口右に馬の函を曳く姿がみられる。

(春日)